

# 島崎藤村の『春』における「懐剣」の象徴性について

朴 承柱

キーワード 懐剣、峰子の換喩、銀粧刀、伏姫物語、宿魂鏡

## 一、はじめに

島崎藤村の『春』(1908)は彼の恋愛観や女性観がよく表れている作品である<sup>1)</sup>。この作品に関する従来の先行研究では、「懐剣」に関する言及はそれほど問題視されていない。それは『春』で「懐剣」が出てくる場面が全体の百三十二章の中で僅か六カ所に過ぎないからであると考えられる。従来の研究では、『春』は藤村の自伝的な小説であるということを踏まえて、『春』での「懐剣」の描写は自伝的事実とは違ったフィクショナルな装置として用いられているという指摘に止まっている。また、このようなフィクショナルな装置はたいてい「恋愛の象徴」、「人生問題の象徴」<sup>2)</sup>になっているということが付け加えられている。

しかし、『春』での「懐剣」の意味を諸先行研究者が指摘しているような「恋愛の象徴」、「人生問題の象徴」のフィクショナルな装置としてのみ取り扱って果たしてよいものであろうか。藤村が「懐剣」を自伝的な事実以上に意味づけを行ったことにはそれ以外の意図があったと十分考えられる。

そこで、本稿では以上の先行研究を踏まえ、『春』における「懐剣」の象徴性を他の角度からも考察することによって、島崎藤村の恋愛観や女性観をより明確にしたいと思う。

## 二、『春』における「懐剣」の象徴的な意味

### 二、一、 峰子の換喩としての「懐剣」

『春』で「懐剣」が最初に登場するのは「第六章」の〈箱根の宿〉での会話場面である。岸本が「関西漂泊」から戻ってきた後、東京の友人達と東海道の〈吉原の宿〉で会合する「第四章」では、「関西漂泊」時の岸本の三角関係を仄

めかす記号として、「西京」という女性が話題に登場する。その後、「第六章」の〈箱根の宿〉の場面で再び「西京」が話題に登場し、そこで初めて「懐剣」が出てくるのである。以下、その場面を取り上げる。

「真実まことなんですか、西京が君に懐剣わいけんを贈つたとか言ふのは。」

「え、。」岸本の顔は紅くなる。

「如何いふ積あもりで彼様いふ物を君に贈つたのか、其を西京に聞いて見た  
いって、しきりに岡見君が左様言つて居ましたつけ。」「あれは母親おつかさんの  
形見なんださうです。」「形見？」今更のやうに市川は事の真相を看破した  
らしく點頭うなづいた。「しかし、君も非常な難局に立つたものさ。」<sup>3)</sup> (p.16、傍  
点筆者、以下同様)

この場面で友人達は岸本が「西京」から「懐剣」を送ってもらったことに対して冷やかしている。その友人の一人である市川は久しぶりに会った岸本に〈『あれ程苦勞して来乍ら、斯ういふ光沢くわくさくで居るんだからねえ』〉とく意味有りげなこと〉(「第三章」と言い、「第四章」でも、市川は岸本の様子を、〈妙に意味有りげな微笑を浮べ〉て眺める。そして、市川は〈『岸本君の為に西京の健康を祝す』〉と言い、岸本と西京との間に恋愛沙汰があったことをも暗示する。この際、『懐剣』は岸本に対する峰子の愛の告白の印である」と言っているようなニュアンスを漂わしている。しかも、「懐剣」が峰子の母親の形見であるという点で、その重みを加えているのである。和田謹吾は、ここで「懐剣」を「昔、女性が護身用として嫁入りなどの時に親から与えられるもので、女にとっては特に重要な意味をもっていた」<sup>4)</sup>と注釈をつけている。これと関連して、「懐剣」の辞典的な意味を調べてみると、概ね、次のようである。

- 1) 『現代国語例解辞典』<sup>5)</sup>：昔、多く、女性が懐に入れていた護身用の短刀、ふところがたな。
- 2) 国史大辞典第三卷<sup>6)</sup>：懐中に納めて護身用とする短刀。  
懐刀（ふところがたな）・守刀（まもりがたな）ともいう。
- 3) 日本大百科全書<sup>4)</sup>：『古事記』に「自懐出劍」（懐から劍を出す）とあるように、懐に隠し持つ刀劍のことをいう。しかし、これは特殊な様式のものではなく、『武器考証』に「此懐刀ハ腰刀ナリ」とあるように、短い刀を懐中深く隠し持って外に現さず、火急の際に用いる。一般に女子が錦の袋に入れて胸元に差すような誤解があるが、結婚式に花嫁が懐剣を懐にするのは明治以降のことである。
- 4) 広辞苑<sup>8)</sup>：懐中に携える護身用の短刀。ふところがたな。

- 5) 日本国語大辞典<sup>9)</sup>：ふところに入れておく護身用の短刀。  
ふところがたな。一尺三寸。

このように、「懐剣」に対する辞典的な意味はたいいてい、「懐に入れていた護身用の短刀」の意味として記載されている。「懐剣」が女性にとって特に重要な意味を持つという和田の解釈は、男性の護身とは少し違う意味を想定したものであろう。女性の身の安全を象徴する「懐剣」を恋愛相手の男性に渡すということは、相手に自分の身を任せ、保護されることを示そうとしているのではないだろうか。こうした意味を持つ「懐剣」が『春』ではどんな意味を持っているのかを、例を挙げながら分析してみたい。

次に「懐剣」が出てくるのは岸本が吉原で友人達と別れてから暫くの間泊まっていた鎌倉の寺を発とうとする時（第十二章）である。この場面で「懐剣」には峰子のことを思う岸本の気持ちが表れている。

木挽町<sup>こぎまち</sup>にある菅の家を指して、岸本が鎌倉の寺を発とうとした頃は、最早何となく空の模様も秋めいている。彼が風呂敷包の中には数冊の愛読書、例の西京の人 一峰子から贈られたといふ懐剣、着替の単衣物が二枚、唯それだけである。これから東北の地方へ向つて旅立とうといふ彼は、裕<sup>あはせ</sup>織<sup>おり</sup>一枚持つて居ない。(p.29)

上引の文で岸本は風呂敷包の中に愛読書と着替えの単衣物、そして峰子から贈られた「懐剣」だけを取りまとめて旅支度をしている。ここで、「懐剣」は、峰子に対する岸本の心境を表現する装置として用いられている。寒い東北地方に旅立つのに裕織一枚も持たない岸本であるが、峰子の「懐剣」だけは大事に保管している。このような岸本の行為を通して峰子に対する彼の心境が読み取れる。

しかし、これはどこまでも岸本的心境の変化を表現するための一つの伏線に過ぎない。次に「懐剣」が岸本的心境の変化を表す装置として使用された場面（第二十章）を見てみよう。

早く遠いところへ行け——斯ういう声が岸本の耳の底にあつた。遠く離れて、許婚のある人を忘れたと思ふ程、彼の胸は堪へがたくなつたのである。

そこで八戸行を急いだ。別離<sup>わかれ</sup>を告げて菅の家を出る前に岸本は峰子から贈られたといふ懐剣を取出して、白の袱紗<sup>ふくさ</sup>のまゝ友達に預かつて貰つた。(p.42)

岸本が鎌倉から八戸へ旅立つ途上、しばらくの間、東京に滞在していた頃の心境の描写である。ここで「遠いところへ行け」というのは、苦悩する岸本の「精神の内部」(p.7)の声である。「許婚のある人」というのは、勝子を意味する言葉である。その勝子に対する岸本の熱情が彼を旅立たせるのである。岸本が最初、「関西漂泊」に出かけたのも、教え子の勝子に対する恋情のためであった。師弟間という身分的な状況から来る倫理的な責任感と自分の本能的な恋愛感情の間で葛藤しつつ、岸本は「関西漂泊」を敢行したのである。これは岸本にとって、すべてを捨てるための旅であった。教職や家族や将来の夢までも捨て、「奥の細道」の芭蕉にあやかる旅<sup>10)</sup>であり、「憐れむ可き巡礼」(p.8)でもあった。それほど、勝子に対する岸本の愛の熱情は激しかったのである。

このように、『春』という作品に描かれている岸本にとって、旅はいつも現実逃避の手段であった。しかし、八戸行きは逃避的なニュアンスをかもし出しているが、勝子に対する恋情が恋愛関係に発展することを描写するための導入段階として用いられているに過ぎない。それは岸本の苦悩する「精神の内部」の描写と友人の菅に峰子の「懐剣」を預けるという場面を通して暗示される。岸本が八戸への旅を急ぎつつ、峰子から贈られた「懐剣」を菅に預かってもらうという描写は、峰子との関係を絶つということの意味しているように思える。ここで、「懐剣」が勝子に対する岸本の煩惱とともに描かれているのは岸本の心境の変化を表現する装置なのではなかろうか。また、「懐剣」が「白の袱紗」に包まれている描写から推定すると峰子の純潔なる恋愛（「白」のイメージ）を象徴しているように思われる。この場面以後、「懐剣」は作品の後半に至るまでほとんど出てこない。それは岸本の思いが峰子ではなく勝子に移っていることを意味する。ところが、この「懐剣」が作品の後半になると、違った象徴性も含めて再び登場する（後述参照）。『春』の前引の「第二十章」での「懐剣」は八戸行きの場面で峰子との関係の断絶を意味する装置として用いられているが、それ以後、「懐剣」が再び登場する場面（第百九章）を見てみることにする。

其時菅は白い<sup>みくぎ</sup>袱紗に包んだ物を取り出した。それは岸本が西京の峰子から贈られたといふ懐剣であつた。『二三日前に木挽町へ寄つたら、斯様なものが出て来たよ。』と言つて、菅は微笑んで、『随分長く預かつてたネー最早これは返しても可からう』

とその預りの品を友達の方へ押遣つた。漂泊の記念は斯うして再び岸本の手に戻つたのである。それは岸本が鎌倉から出て来て八戸の方へ発たうとした当時、木挽町の家で菅に預かつて貰つたものである。(p.202)

池の端で岸本は友人達と会合している。その時、八戸へ旅立つ前に菅に預けた「懐剣」を、岸本が返してもらっている。菅は岸本に峰子の「懐剣」を返し、「随分長く預かつてたネ」と言っている。「随分長く」というのは、峰子との断絶の時間であり、岸本の彷徨の時間でもある。「関西漂泊」という「憐れむ可き巡礼」の最中に出会った峰子との恋愛は、勝子に対する岸本の恋情の深化によって断絶された。そして、その断絶の時間には勝子（「許嫁のある人」との、逃げられぬ恋愛のために彷徨する岸本の苦悩が表されている。また、菅は「最早これは返してよかろう」と言っている。この言葉が意味することは何であろうか。ここで「最早」という副詞は、勝子の死を意識した発言である。峰子との断絶が勝子に対する恋情のためであったことを知っている菅は、もう勝子に死なれたので（後述参照）、取えて自分がそれを預かっている必要はないということを決めかすのである。では、ここで、「懐剣」を預かっている人物が、なぜ、菅なのであるのだろうか。それは、『春』の前半に描かれているように、菅と岸本は恋愛の苦しみに深く同感している。しかし、恋愛の象徴である「懐剣」を菅が岸本に返すということは、二人の恋愛観が変わったことを意味する。『春』の「第百八章」で菅が「ラブなんてものは、其様に大騒ぎする程のものぢゃないんだネー畢竟、飯を食ふようなものサ」（p.201）と言っているのは岸本を非難する発言でもある。和田謹吾はこれを「岸本との共鳴の断絶の象徴としての表現」<sup>11)</sup>であると見ている。

一方、この場面の「懐剣」の描写について勝本清一郎は、「実際は秋骨に預けられた儘となり、今でもこの現物が長いあいだの謎を秘めて戸川家に現存する。」<sup>12)</sup>と証言している。戸川秋骨は菅のモデルになった人物である。勝本の指摘によって、これは定説化されたが、橋浦史一は勝本の指摘を借りて、『春』のこの部分は藤村のフィクションであり、作者自身の意味付けが行われた部分である<sup>13)</sup>と付け加えている。だとすれば、ここで作者がフィクションを通して表現しようとした「懐剣」の意味付けは何であろうか。岸本の流れ漂う「心の漂泊」を象徴する装置として「漂泊の記念」物である峰子の「懐剣」を「秘鍵」として利用しているのである。これは「懐剣」がいつも旅とともに登場するという事実とも関連が深いと思われる。

次は岸本が精神的な師として思っていた青木の自殺、悲恋の相手であった勝子の結婚後の死、そして兄の民助の入獄による家の重圧など、精神的な行き詰まりの状態に置かれている岸本を菅が心配して彼の家を訪ねてきた時の場面（第百二十六章）である。

其時岸本は寢床の上に跳はな起きた。彼の懐中ふところには黒塗の鞆に入つた懐剣が

隠してあつた。それは菅から返して貰つて、二階の本箱の引出に藏つて置いたものである。友達に見られまいとして、彼はそれを布団の下へ隠した。斯ういふ精神の状態こゝろに在りながらも、岸本は自分の苦痛を友達に訴へようとはしなかつたのである。彼は唯、暗い憤怒の影を額の処に見せて、悄然と寢床の上に坐つている。菅にはサツパリ様子が解らない。

『復たラブでも始まつたんぢやないか。』と菅が笑ひ乍ら言つた。(p.233)

この場面での「懐剣」は両義性を含んでいる。その両義性とは、峰子の換喩としてコード化された「懐剣」が岸本の心境の変化（精神的な彷徨）を表していることと、それに加え、死の隠喩として使われている点である。上引の場面で「斯ういふ精神の状態」というのは、岸本の精神的な彷徨を意味する。勝子との恋愛の終局から来る心の傷心を、一度決別を告げた峰子から慰めてもらうために、岸本は峰子に手紙を出した。それも、お金の工面を頼む手紙である。岸本はこのような自分の振舞について、「婦人の前に跪づく」「薄志弱行な男子」、「年老いて好色な後家にかしづくわかもの」「裕福な女に弄ばれる男妾」、「金の為にはいかなる媚を売らうとする美しい節操のない男子」(p.228)のようであると言ひ、自らを咎めた。しかし、彼はこのような自分の「恥づべき心情」にもかかわらず、峰子に「金の無心の手紙」を書いて「死んだ人のやうに」「深い熟睡に陥つた」(p.228)のである。これは岸本にとって、自分の死を予感するような手紙であり、煩惱の結果なのである。「またラブでも始まつたんぢやないか」という菅の言葉から彼の精神的な彷徨は「ラブ」に基づいているということが窺われる。次は「懐剣」が最後に登場する場面（第二百二十七）である。

慨然として死に赴いた青木の面影は、岸本のめの上へに眼前あつた。『我事を畢れり』と言つた青木の言葉は、岸本の耳にあつた。幾度か彼はあの友達の後を追つて、懐剣を寢床の中に隠して置いて、悶死しようとしたのである。身体からだの壮健な彼には奈何しても死ねなかつた。(p.234)

岸本は峰子から『一まことに御気の毒とは存じ候得共、何分にも薄給の身にて……』(p.234)という返事をもらひ、絶望の果てに悶死しようとする。勝子に対する熱情が峰子との関係に終止符を打たせたが、峰子の存在は岸本に「深い熟睡」を与えてくれるほど、心の慰勞になる人物であつたと思われる。しかし、峰子から届いたお金の工面に対する断り状は岸本の期待に反するものであつたのである。それは、「我事畢れり」と言つた青木の言葉が岸本自身のことのように思われる絶望的な返事であつた。この峰子の返事は勝子と峰子の間を

往来する岸本の軽薄な心に対する厳しいメッセージでもある。「第二百十六章」で「懐剣」が死を隠喩しているように、ここでも「懐剣」は岸本の死を隠喩している。「懐剣」は自殺した青木を思い浮かべる程、岸本の煩惱が深いことを象徴している。

このように、峰子の母親の形見であり、峰子の純潔なる恋愛の印である「懐剣」が岸本の「死」に隠喩されるのは、「漂泊の記念」物である「懐剣」が漂泊する岸本の恋愛の形見でもあるからである。渡辺廣士<sup>14)</sup>は岸本の関西漂泊が恋愛を素材にした「書くための旅」と見なして「懐剣」を「ペン＝剣、書クコト＝戦場という寓意の機能を付されること」と解釈している。これは興味のある指摘ではある。しかし、岸本の関西漂泊が「書くための旅」であったとしても「懐剣」を「ペン＝剣」の寓意と見るには多少無理があるのではないかと思われる。また、前述したように、滝藤満義は「懐剣」を「恋愛の象徴、人生問題の象徴」として指摘している。しかし、それ以上に、「懐剣」は、単なる恋愛の象徴のみならず、純潔なる恋愛を希求する作者の意志も含んでいると思われる。作者は峰子を「純潔なる生涯」(p.112)を生きてきた女性として描写し、「懐剣」を峰子の換喩としてコード化させることによって、純潔なる恋愛を表現したかったのではないだろうか。藤村において、このような純潔なる恋愛に対する認識は、北村透谷の恋愛論の影響を受けたものと言えよう。次の節では透谷の影響と関連して「懐剣」の象徴性を調べてみることにする。

## 二、二、 精神的な恋愛

### 二、二、一、『南総里見八犬伝』の「伏姫物語」

藤村が純潔なる恋愛の表現を「懐剣」にたとえる発想はどこに由来するのだろうか。そこには北村透谷の恋愛観の影響が考えられる。藤村が透谷の恋愛論「厭世詩家と女性」<sup>15)</sup>に精神的・文学的に深く感銘を受けたことは周知のことである。藤村は「恋愛は人世の秘鑰なり」という当時としては画期的な内容の恋愛論を通じて、初めて「近代的な概念の恋愛」<sup>16)</sup>を習得するようになる。以降、藤村が透谷に対して生涯精神的指導者として尊敬の念を抱いていたことは有名である。「厭世詩家と女性」は「恋愛」なるものが市民権を得ていない時代に、「恋愛」こそ人生の至上価値であると、真正面から「恋愛」を肯定した空前絶後の「恋愛」賛美の思想表明<sup>17)</sup>であった。木下尚江も「厭世詩家と女性」の「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ」<sup>18)</sup>という冒頭の一文について「まさに大砲をぶち込まれたようなものであった」<sup>19)</sup>と、その衝撃を述べている。この恋愛論で透谷が主張していることはあくまでも精神的な恋愛であった。透谷がのちに妻となる

石坂美那子へ宛てた手紙には「吾等のラブは情欲以外に立てり、心を愛し、望みを愛す」<sup>20)</sup>とある。なお、透谷は「『伽羅枕』及び『新葉末集』で「元禄文学者の恋愛に対する思想は、好し純然たる遊郭外の素人を写す場合にも宛然として遊郭的恋愛、即ち世に所謂好色的恋愛を主としたる」<sup>21)</sup>ものであり、その「好色は人類の最下等の獣性を縦にしたるもの」<sup>22)</sup>であると述べ、肉体的な恋愛については否定的な見解を示している。また、同時に透谷は「純潔」の価値を非常に強調している。このことは、明治25年(1892)10月号の『白表・女学雑誌』に発表された「処女の純潔を論ず—富山洞伏姫の一例の考察」でよく表れている。この論では曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』(以下、『八犬伝』と略す)の「伏姫物語」(仮称)を取り上げている。そこで透谷は「伏姫の中に八犬伝あるなり」といって伏姫という人間と八房犬との、精神的で高尚な恋愛について述べている。透谷は江戸戯作物に出てくる男と女の関係というものは、いつも女はセックスの対象としか考えられていなかったといつて浅薄な性の描写を非難し、馬琴の『八犬伝』の秀逸な作品性と伏姫の純潔なる生き方を褒めている。以下は「処女の純潔を論ず」の冒頭の一節である。

天地愛好すべき者多し、而して尤も愛好すべきは処女の純潔なるかな。もし黄金、瑠璃、真珠を尊としとせば、処女の純潔は人界に於ける黄金、瑠璃、真珠なり。夫れ高尚なる恋愛は、其源を無染無汚の純潔に置くなり。純潔より恋愛に進む時に至道に叶へる順序あり、然れども始めより純潔なきの恋愛は、飄漾として浪に浮かる、肉愛なり、何の価値なく、何の美観なし。<sup>23)</sup>

この「天地愛好すべき者多し、而して尤も愛好すべきは処女の純潔なるかな。」という冒頭の一節は当時の青年達に愛唱されたという<sup>24)</sup>。上記の一文は「肉体上の無垢、処女性が価値化」<sup>25)</sup>されていると見られる。馬琴自身も『八犬伝』世界の「秘鍵」であると言っている「伏姫物語」には、「懐剣」が伏姫の「肉体上の無垢、処女性」を明らかにする装置として象徴的に表されている。

では、『八犬伝』の中で「懐剣」という言葉で表現されている箇所を抜粋して、「懐剣」が象徴する意味をもう一度考察してみたい。

「やよ八房か、うけたまはれ。人に貴賤の差別あり。婚縁は其分に随ひ、みな類をもて友とせり。かゝれば下の下ざまなる、穢多・乞児といふといへども、畜生を良人とし、妻とせらるる例を聞ず。況てや吾儕は国王の女児、平人の婦となるべからず。さるを今畜生に、身を棄、命をとらする事、

前世の業報か。併巖君の御詫重きによつてなり。これらのよしを弁へず、情欲を遂んとならば、わが懐剣こゝにあり。汝を殺して自害せん。又一旦の義を以、偏に吾儕を伴ふとも、人畜異類の境界を弁へ、恋慕の欲を断ならば、汝は則わが為に、菩提の郷導人なるべし。然るときは汝が随意、何地までも伴れん。いかにやいかに。」と、懐剣を、逆手に取て問詰給へば、(略)<sup>26)</sup>(傍点筆者)

伏姫は八房との異類婚姻の呪術によって、やむを得ず富山の洞穴で犬と共に暮らすようになる。しかし、彼女が人間の尊厳を捨てていないことは上引の文章でもよくわかる。八房に同行する時も伏姫は八房に人畜のけじめを教えさとし、自分の純潔を守るためには「懐剣」で自害しようと脅かしているのである。自分を恋慕する犬と一緒に暮らすことはしても、皮膚だけは許さないのである。ここで「懐剣」(＝「護身刀」)は確かに伏姫の純潔を守る道具として使用されている。このような純潔の象徴物としての「懐剣」は伏姫の処女受胎の一節によってより明確になっている。伏姫は山中で牛に乗った笛吹き童子に逢うが、その童子は伏姫の処女受胎を「鶴は千歳にして尾らず、相見てはらむ事あり」と幾つかの例を引いて告知する。しかし、このような神聖受胎は地上的な存在としての伏姫にとっては、免れえぬ業因に過ぎない。それ故に伏姫は身のあかしを立てるために「懐剣」で切腹自殺してしまう。このように『八犬伝』では、「懐剣」が伏姫の純潔を示す媒介物として扱われているのである。

透谷は「処女の純潔を論ず一富山洞伏姫の一例の考察」で、伏姫が「懐剣」を持って肌身の純潔を守る姿を通して、肉体的な好色を否定し、「精神的・高尚な恋愛」として「純潔」の価値を礼賛し、「処女崇拜」をしているのである。

『八犬伝』で伏姫の純潔を守る象徴的装置である「懐剣」とほぼ同じ概念が韓国にも「銀粧刀」という形で存在する。一般的に、「銀粧刀」と言うと、韓国では昔、女性達が自分たちの貞操を守るためにいつも身に着けていた、女性の純潔の象徴であった。「銀粧刀」の辞書的な意味を調べてみると、「銀で作った短刀で、普段着物にする飾りものの一つであった。男女が短刀を携える風習は高麗時代から始まって朝鮮時代に広く一般化された。しかし、女性における銀粧刀は飾りものだけではなく、自分を守る護身用としても使われた」<sup>27)</sup>とされている。また、その実例として『東国新統三綱行実図』<sup>28)</sup>にその記録が多く残っている。その記録によると、「銀粧刀」は主に、壬辰の乱(1592年文祿の役)の時、常に短刀を携帯し、非常時に自殺あるいは相手を攻撃するのに用いたとある。その一例として次の絵がある。



絵①



絵②

上引の絵①と絵②の記録によると、「懷中小刀」あるいは「小刀於懷中」は韓国語では「pumgawundezagangal」と記されている（絵①、絵②を参照）が、これは「銀粧刀」を意味している。日本の「懷劍」という言葉のように、韓国

の文献では「懐中小刀」、「小刀於懐中」と言って「銀粧刀」を表わしている。そして、この「小刀」は女性達が等しく皆自分の身体、特に、貞操を守るための手段として用いている。しかも、女性達は自殺をしてまで貞操を守ろうとしているのである。この記録ではこのような女性達を「烈女」として称して後世に伝えているが、「銀粧刀」には女性は純潔でなければならないという、儒教的な価値観が深く投影されたものであると言えよう。このように、『八犬伝』での「懐剣」の概念と韓国の「銀粧刀」の概念は両方とも女性の純潔の象徴としてイメージ化されていると思われる。

藤村は自分自身と「文学界」を中心とする透谷などの青春を描いた『春』の執筆にあたって、舞台となる明治20年代のことを思い出すために、『透谷全集』などを読みなおしたとされる。なお、実際に『春』の中には「厭世詩家と女性」の恋愛論を初めとする透谷の文章がたくさん援用されている。北村透谷の恋愛論に心酔していた藤村は、この伏姫の純潔を守る道具として使われた「懐剣」から触発され、恋愛の純潔性を象徴する装置として「懐剣」を用いたのではないかと思われる。実際、藤村は『ある女の生涯』(1921)の中で「伏姫物語」について言及をしている。精神病院に入院した「おげん」が<廊下を歩む犬の足音>という幻聴を聞き、<八つ房といふ犬に連添つて八人の子を産んだといふ伏姫のことなどを想像>し、<まだ心も柔く物にも感じ易い若い娘の頃に馬琴の小説本で読み、北斎の挿絵で見た伏姫の物語の記憶>(p.93)という表現をしている。これは藤村自身が「伏姫物語」に目を通し、作品の中にそれを反映していることを立証するものである。このように、「伏姫物語」から受けた影響が『春』の「懐剣」に用いられ、恋愛<sup>ラヴ</sup>を象徴する記号となっているのである。

## 二、二、二、『春』の「懐剣」と『宿魂鏡』の「鏡」

本節では「恋愛<sup>ラヴ</sup>」の象徴としての「懐剣」の設定は北村透谷の『宿魂鏡』<sup>29)</sup>(1893)の精神的な恋愛の象徴である「鏡」と類似していることについて考察してみたい。

透谷は「近代的な恋愛のマニフェスト」と呼ばれる「厭世詩家と女性」を發表した翌年、『宿魂鏡』という幻想小説を書いた。『宿魂鏡』は文字通り「人間の魂を宿す鏡」という意味で、男女の切ない恋愛模様を描かれている作品である。まず、<上><下>の二部から構成されているこの作品のあらすじを簡略に紹介する。

地方出身の青年山名芳三は立身出世の夢を抱いて上京し、大学で政治学を学ぶ。そのうち、次官戸沢男爵にその才能が見出され男爵の邸に寄宿するようになる。そこで芳三は一すずに阿梅という許嫁がいるにもかかわらず—男爵の令

嬢弓子と相思相愛の間柄になる。ある日、男爵の留守中弓子の継母から家を出てほしいという「断り」が出て芳三は邸を離れることになる。弓子は継母の計略によってやむを得ず芳三と別れる。その際に「必よ必よ、忘れては下されませぬ」と言って、自分の魂魄が宿っている「古鏡」を「別離の時の形見の品」として芳三に渡す。『宿魂鏡』の〈上〉)

『宿魂鏡』の〈下〉では、「幻鏡」を介した芳三と弓子との神秘的な恋愛が展開されている。弓子の家から出てきた芳三は立身出世の夢を捨て、都会と隔絶された「幽居」で隠遁生活を送る。しかし、弓子のことばかり偲んでいる芳三の隠遁生活はついに彼を狂乱させる。それは芳三がいつも持ち歩いている弓子の「古鏡」の仕業のためであった。ある日、芳三が「古鏡」を壁に投げつけると異形の怪物が登場し、弓子（弓子の幽霊）と行動を共にする。そして、再び「古鏡」を壁に投げつけると異形の怪物の姿が消えてしまうという不思議な現象が起る。それから、ある夜、「幻鏡」の上の弓子が「幽居」の芳三を訪れてくると、異形の怪物も壁上に姿を表して二人を嘲笑する。結局、「幽居」の芳三と「東京」の生身の弓子は「幻鏡の仕業」によってほぼ同じ時刻に死んでしまう。

この作品に出てくる人間の魂を宿す「鏡」は作品構成上、『春』の「懐剣」と類似していると思われる。第一には、この作品で主人公の山名芳三が弓子から別離の時の「形見」として「古鏡」を渡されることである。これは前節（二、一）ですでに述べたように、『春』で岸本が「関西漂泊」で別れる際に峰子から「懐剣」を渡されるという設定と類似している。『宿魂鏡』の「鏡」が芳三と弓子との別離の「形見」として弓子の魂を象徴しているように、『春』における「懐剣」も峰子の母の「形見」として岸本に対する峰子の思いが寄せられている。第二に、この「古鏡」は『春』の「懐剣」のように、芳三がいつも「懐中」に入れて持ち歩くものとして、主人公の苦悩の象徴である。なお、『春』で岸本が生活の行き詰まりや恋愛のつらさのため、苦悩し死を思い浮かべる時、その暗示として「懐剣」が使用されているように、『宿魂鏡』の「鏡」も「盲鏡」であり、弓子と芳三、二人を心中させる役割を担う「死鏡」として描かれている<sup>30)</sup>。

第三に、『宿魂鏡』の「鏡」と『春』の「懐剣」は二人の女性との三角関係の中で主人公の心境を照らす役割を担っている。すでに阿梅という許婚のある芳三が弓子という女と相思相愛の間柄になっているという作品構成は『春』で岸本が教え子の勝子に思いを寄せながらも、関西への漂泊の旅で、また峰子という女性と恋愛沙汰が生じ、三角関係に置かれるという作品構成と類似している。また、『春』で「懐剣」が峰子と「意中の人」の勝子との間を蕩揺する岸本の気持ちを表しているように、『宿魂鏡』でも、この「鏡」は芳三の「意中の人」の

弓子の姿が写される「幻鏡」としての役割を持っている。この際、『宿魂鏡』の鏡像は見るものの姿を写すのではなく、見るものの「意中の人」の姿を写すものである。

以上のような二作品の類似性から推測してみると、藤村が『春』の中で「懐剣」を岸本と峰子の「ラブ」の象徴として立てようとする意図の中には、このような透谷の『宿魂鏡』の「幻鏡」の影響もかなり受けているのではないかと思われる。

『宿魂鏡』において「幻鏡」は相思相愛の恋人同士が出会い、永遠の恋愛（精神的恋愛）を成就する場として設定されている。これは『八犬伝』における伏姫の懐妊を暗示する「止水の面影」（以下、「伏姫の鏡像」と類似した機能である。透谷の「処女の純潔を論ず」と「心池蓮」（1893）をみると、「富山の洞」なる「幻界」で、伏姫は「止水」と「池」に自分の姿が半人半獣（体は人間で、頭は犬）となって映っている「止水の面影」（＝「伏姫の鏡像」）をみて驚く場面に関する言及がある。

「<sup>あるひ</sup>有一日伏姫は、<sup>すずり</sup>硯に水を<sup>そそが</sup>滴んとて、<sup>いで</sup>出て<sup>しみず</sup>石涌を<sup>むずび</sup>掬給ふに、<sup>よこぼしり</sup>横走せし<sup>とまりみず</sup>止水に。うつるわが影を見給へば、その<sup>かたろ</sup>体は人にして、<sup>こころ</sup>頭は正しく犬なりけり。」  
云々<sup>31</sup>。

伏姫が硯に掬げんとして、犬の首を水面に見たりといふは、この池の上にはあらはれたる<sup>まぼろし</sup>幻影なり、この池を鏡として見る時のありさまなり。この池を鏡とする時に、この池の主人となるものは、本心（良心）の外なかるべし<sup>32</sup>。

上に引いた「処女の純潔を論ず」と「心池蓮」の一節を見ると、透谷は伏姫の半人半獣の姿を映している「止水」と「池」を「鏡」に見立てていることがわかる。なお、『八犬伝』の「止水」と「池」（「鏡」）は「伏姫の純潔」に基づいた伏姫と八房との「高尚なる恋愛」を象徴するものとしても描かれている。

このような『八犬伝』の構想は『宿魂鏡』における精神的な恋愛を象徴する「幻鏡」の構想と類似している。これは透谷が『宿魂鏡』の創作の際、『八犬伝』の影響を受けているからであると考えられる。『宿魂鏡』における『八犬伝』の影響というのは、上に述べた半人半獣の伏姫の姿を映している「止水」と「池」（「鏡」）のイメージが「幻鏡」のイメージの中に反映されていることが挙げられる。その他に、『八犬伝』では「富山の洞」なる「幻界」と「人界」の区別が川を挟んでいるが、『宿魂鏡』でも涙の川を挟んで「人界」と「幽居」が

存在する。なお、この「富山の洞」なる「幻界」（隠居の場所）は「幽居」と類似した異空間としてとらえることができる。

一方、透谷の文章の中に「鏡」が出てくるところは『宿魂鏡』の「幻鏡」他に、『蓬莱曲』の人間の魂を象徴する「魂鏡」と「心機妙変を論ず」（1892）の「心鏡」がある。また、恋愛の願望や別離の苦痛や死の意味を含蓄している『蓬莱曲』の「魂鏡」と「厭世詩家と女性」の「恋愛は一たび我を犠牲にすると同時に我れなる『己れ』を写し出す明鏡なり」という箇所などにも現われている。このような透谷の「鏡」の意味は『宿魂鏡』の「幻鏡」にそのまま収斂されているように思われる。

島崎藤村は透谷死後、その翌年の明治27年（1894）10月、彼の遺稿を整理、『透谷集』を世に出した。藤村が『春』の創作にあたって透谷をモデルにした青木という人物を作り出すために『透谷全集』を丹念に読み直していることは周知の通りである。その際、藤村はこのような透谷の「鏡」のイメージに触発され、『春』で「懐剣」を恋愛の象徴的な装置として用いたのではないかと推測される。透谷が馬琴の『八犬伝』から『宿魂鏡』の創作のモチーフを得ているように、藤村も『春』の恋愛物語構成上、伏姫の「懐剣」の純潔なイメージに基づき、透谷の『宿魂鏡』の「幻鏡」のような精神的な象徴を作り出したかったのではないかと考えられるのである。

### 三、おわりに

以上のように、島崎藤村の『春』に表れた「懐剣」には、透谷の「処女崇拜」思想から影響を受け、「伏姫」の「懐剣」の純潔で高尚なる恋愛のイメージと、「伏姫の鏡像」を反映した『宿魂鏡』の「幻鏡」のイメージが反映されていると言えよう。それは島崎藤村の恋愛観と処女性を強調する女性観の反映である。藤村は北村透谷の恋愛論から深い示唆を受けており、そういった透谷の影響が『春』での「懐剣」を自伝的な事実以上に意味付けをさせたのである。それは精神主義的恋愛観である。透谷を通して、明治以後西洋から輸入された霊肉二元的な「恋愛」の概念を学んだ藤村は、「処女崇拜」（「純潔」に対する価値）の女性観を「懐剣」という記号に託しているのである。しかし、藤村の恋愛観は霊、すなわち、精神的な部分だけを強調したものではない。藤村自身の恋愛論「人生の風流を懐ふ」（『藤村全集』第十六卷所収）では＜大微笑界＞と＜小微笑界＞に分け、天愛と肉愛を区別して論じている。『春』では＜大微笑界＞の精神的な恋愛の象徴として「懐剣」を用いており、＜小微笑界＞の肉愛は「手」や

「眼」、「ハンカチ」などの身体語と関連づけて描写している。「懐剣」の象徴性は今後、このような錯綜する藤村の恋愛観を明らかにするためにも、重要な役割を果たすと考えられる。

## 注

- 1) 『春』は明治41年（1908）4月7日から同年8月19日まで、135回にわたって『東京朝日新聞』に連載された新聞小説で、『破戒』（1906）に続く島崎藤村の第二の長編小説であり、かつ彼の初めての自伝的小説でもある。これが同年10月「緑蔭叢書第二篇」として上梓された時は、原稿の一部に削除と改稿が行われ、章数は132章に減じた。『春』は最初、単行本として公にするつもりであったが、『春』執筆中の談話（1907・1）が発表された頃、『東京朝日新聞』から藤村の作品を連載したいという交渉が、当時の社会部長渋川玄耳を通してあった。その頃は丁度、東京朝日新聞社に長谷川二葉亭（二葉亭四迷）が居て、彼が藤村を推薦したということで、それを聞いた藤村は氏の厚意を喜び受諾したそうである。しかし、二葉亭の生前に二人が会ったことはないと藤村が述懐している。
- 2) 滝藤光義 「『春』の方法」『島崎藤村一小説の方法』所収、明治書院、1991、p.133
- 3) 『春』本文の引用は『藤村全集』第三卷（筑摩書房、1967）による。
- 4) 和田謹吾注釈『島崎藤村集Ⅱ』、日本近代文学大系14、角川書店、1970、p.63
- 5) 小学館、1985
- 6) 国史大辞典編集委員会、吉川弘文館、1983
- 7) 小学館、1988
- 8) 第五版、岩波書店、1998
- 9) 第二版、学習研究社、1988
- 10) 『桜の実の熟する時』（1914-1918）の後半で、主人公の岸本捨吉が芭蕉の「奥の細道」の一文を引用しながら、自分の関西への旅を決意する場面がある。『桜の実の熟する時』の発表時期は『春』より後年のことであるが、作品の内容は『春』の序曲のような印象を与える。『桜の実の熟する時』の後半は『春』の冒頭につながる。
- 11) 前掲『島崎藤村集Ⅱ』、p.255
- 12) 亀井勝一郎 「『春』をめぐる藤村の手紙」『島崎藤村』所収、日本文学研究

資料叢書、有精堂、p.236

- 13) 橋浦史一「春」に見る愛の行方」双文社、1982、p.28
- 14) 渡辺廣士『春を読み直す』創樹社、1994、p.79
- 15) 明治25年（1892）2月『女学雑誌』（第303号、305号）に連載された。冒頭「恋愛は人生の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味があらむ」の一節は当時の人々に衝撃的な感銘を与えた。エマーソンの「恋愛論」に影響を受け、また、徳富蘇峰の「非恋愛」を深く意識している。
- 16) 「恋愛」は明治時代、西洋から輸入された概念である。「恋愛」輸入以前の日本で男女関係は主に遊郭を中心とする好色を意味した。明治知識人達は西洋文明から霊肉二元論とキリスト教を背景にする恋愛観念を摂取することによって精神的な愛こそ尊厳であるという認識、性に対する恥かしさと罪意識を身につけた。北村透谷もキリスト教の影響下で、精神的な恋愛を重視する恋愛観（「厭世詩家と女性」）を表明している。このような明治以降の「恋愛」はこれからの研究課題にしたいと思う。
- 17) 菅野聡美、『消費される恋愛論』青弓社、2001、8、p.56
- 18) 北村透谷「厭世詩家と女性」『北村透谷選集』所収、岩波書店、1990年、p.81
- 19) 「福沢諭吉と北村透谷」『明治文学研究』昭9年（1934）
- 20) 石坂美那子宛書簡、明治20年（1887）9月4日（江刺昭子『透谷の妻 石坂美那子の生涯』所収、日本エディタースクール出版部、1995、p.118
- 21) 前掲『北村透谷選集』所収、p.100
- 22) 同上
- 23) 北村透谷「処女の純潔を論ずー富山洞伏姫の一例の考察」同上 p.187
- 24) 同上、p.403
- 25) 前掲『消費される恋愛論』
- 26) 曲亭馬琴『南総里見八犬伝』小池藤五郎校訂、岩波書店、1985、p.172
- 27) 『韓国民族文化大百科辞典』韓国民族文化大百科辞典編纂部、韓国精神文化院、1991、p.392
- 28) 青丘叢書第二、韓国書誌学会、1960
- 29) 『宿魂鏡』は明治26年（1893）1月13日発兌の「国民之友」（178号）の春期付録に発表された。
- 30) 『宿魂鏡』を執筆した明治26年1月は、透谷と教え子の富井松子とのプラトニック・ラブが盛り上がっていく時であった。それを考えてみると、このような「死鏡」を描いている透谷の思惟は透谷自身の「悲恋」とも無関

係ではないであろうと思われる。

- 31) 同上「処女の純潔を論ずー富山洞伏姫の一例の考察」p.193  
 32) 『北村透谷集』明治文学全集29、筑摩書房、1976、p.118

## 参考文献

- 「春」『藤村全集』第三卷所収、筑摩書房、1967  
 「ある女の生涯」『藤村全集』第十卷所収、筑摩書房、1967  
 「人生の風流を懐ふ」『藤村全集』第十六卷所収、筑摩書房、1967  
 『藤村全集』別巻、筑摩書房、1971  
 日本近代文学大系14 『島崎藤村Ⅱ』 角川書店、1970  
 日本文学研究資料叢書 『島崎藤村』 有精堂、1973  
 明治文学全集29 『北村透谷集』 筑摩書房、1976  
 瀬沼茂樹 『評伝 島崎藤村』 筑摩書房、1981  
 伊東一夫 「藤村における女性像の造形について」 双文社、1982  
 日本文学研究資料叢書 『島崎藤村Ⅱ』 有精堂、1983  
 小池藤五郎 『南総里見八犬伝』 岩波書店、1985  
 高田衛 『八犬伝の世界』 中央公論社、1985  
 勝本清一郎 『北村透谷選集』 岩波書店、1990  
 滝藤満義 『島崎藤村一小説の方法』 明治書院、1991  
 渡辺廣士 『島崎藤村を読み直す』 創樹社、1994  
 江刺昭子 『透谷の妻』 日本エディタースクール出版部、1995  
 菅野聡美 『消費される恋愛論』 青弓社、2001  
 「国文学」 特集「透谷と藤村」 學燈社、1964、6月号  
 「日本文学」 「『宿魂鏡』の成立過程」 日本文学協会、未来社、1968、1  
 『国史大辞典第三巻』 国史大辞典編集委員会、1983  
 『日本大百科全書4』 小学館、1988  
 『広辞苑』 第五版、岩波書店、1998  
 『日本国語大辞典』 第二版、学習研究社、1988  
 『韓国民族大百科辞典』 韓国精神文化研究院、1991  
 『東国新統三綱行実図』 青丘叢書第二、韓国書誌学会、1960

